

## 精神科において患者の看護の必要性和、 継続した看護の方向性を見出した 看護過程の分析

矢野 秀蔵 (応用看護学)

**【キーワード】** 精神科看護・対応困難・看護過程・  
生活過程・統合失調症

本研究の目的は、患者へのかかわりを重ねる中で看護師の患者の見つめ方に変化がおり、患者の言動にも変化が起こった看護過程を分析し、精神科において患者の看護の必要性和方向性をどのように見出すことができるのかを明らかにすることである。研究対象は、精神科病棟で、看護師が、意図的な看護を展開することが出来ていなかった患者に関わり、患者の言動に変化を起こしたと思われる看護過程2事例12局面である。

研究方法は、看護師の患者の見つめ方が変化した関わりをプロセスレコードに再構成し、さらに患者の捉え直しを行った時の見つめ方の変化を記述する。それらを経時的に局面として示し、各局面の特徴を取り出した。そして患者の看護の必要性和看護の方向性をどのように見出したのか分析したところ、以下の結論を得た。看護師が看護の必要性和方向性を見出すことが困難になっている要因として、精神科看護師は患者の繰り返される訴えに注目してそれを止めようとする関わりに陥りやすいこと、また、患者が訴えてこない場合には問題を見過ごしやすい傾向があげられた。そこで、精神科において看護師がどのようにして患者の看護の必要性和、方向性を見出すことができるのかを以下のように取り出した。

1. 患者の訴えや行動にはなにか理由があるはずであると関心を持ち、生活をみて尋ねることにより、患者なりの理由が明らかになり、看護師にどうにかしてあげたいという気持ちが湧き起こる
2. 患者の情報を一つ一つ考えるのではなく、患者がどのような生活を送ってきたのかと患者の立場で

その体験を追ってみると、自分の生活体験との共通性が重なり、一人の人間の生き方が見えてきて患者への人間的な関心が高まる

3. 患者が自分と同じ一人の人間として見えてくると、その人がどのような体験をしているのか、どのような思いを持っているのかを知りたくなり、本人にかかわりたい思いが湧き起こる
4. 患者が社会生活を送る上で困った行動をとったときには、その行動に至った患者の体験や思いを知りたくなり、患者自らが解決の手立てを考えて欲しいとの方向性が明確になる
5. 患者が自ら解決していくときに手助けが必要だと見えてくると、他の看護師と看護の方向性を共有したいとの思いが湧き起こる
6. 看護師が自分自身を客観視できて、どのような患者の見つめ方の変化によって看護の必要性和を見出すことができたのかを理解できると、他の看護師がどこで困っているのか気づくことができ、看護の方向性を共有できるように働きかけることが出来る